

# 医療系単科大学における英語教育

—教授対象と教材及び教授法—

川崎医療短期大学 英語教室

長瀬慶来・名木田恵理子

(昭和54年10月5日受理)

Teaching of English at Medical and Paramedical Colleges

—Teaching Materials and Methodology in Relation to Students' Aptitude—

**Yoshiki NAGASE and Eriko NAGITA**

*Department of English, Kawasaki Paramedical College*

*Kurashiki 701-01, Japan*

*(Received on October 5, 1978)*

## 概 要

川崎医療短期大学及び川崎医科大学の昭和54年度新入生 332 名を対象として、英語学習に対する意識についてのアンケート調査を行ない、そのデータをもとに、彼らの英語学習に対するモチベーションを評価、検討した。その結果、2つの顕著な指向性があることがわかった。1つは、reading におお比較的高度な専門的読解力への指向、もう1つは、speaking 及び hearing における初歩的な会話力への指向である。これら2つの指向に対処するため、我々は、2種類の異なった教材及び教授法の提案を行なう。

- ① 専門的読解力—Grammar-Translation Method  
専門関連分野をとり扱った教材
- ② 初歩的会話力—Oral Approach の改良版教授法  
L. L. の導入  
初等会話教材

## Résumé

A questionair on the consciousness of learning English was conducted on the 332 freshmen at Kawasaki Paramedical College and Medical School. Replies submitted were taken into consideration in the assessment of their motivation towards the learning of English. As a result we found two prominent tendencies. One is that they aim relatively high (enough for their professional use) in reading. The other is that they aim at rather an easy level (i.e. introductory conversational ability) in speaking and hearing.

In order to cope with these tendencies we propose two different methods. First we found Grammar-Translation Method is most effective for teaching them how to read technical papers. Secondly Revised Oral Approach was adoped for teaching them an introductory conversational ability and Language Laboratory was introduced to achieve the goal in a limited time.

## I. 学習者の意識とその分析

外国語を習得しようとする時、様々な因子が働いてその成否を決定づける。その中でも、学習者側の因子としてあげられるのが、

- ① 学習能力（言語知能、記憶力、論理的思考力など）
- ② 学習者の意欲・興味、及び動機づけ
- ③ 学習者の身体的条件（年齢・性別など）
- ④ 環境（友人、教師、家庭、学校、カリキュラムなど）

の4因子である。これら4因子は、英語学習の成果に極めて大きな影響を与えるため、これを検討し、考慮に入れることが、効果的な学習を進める上で不可欠なものとなる。

ところで、これらのうち、①③④は、既に決定済みの因子であり、正確に把握でき、学習者にかなった方法を求める上で参考にできるが、問題は②である。

②の動機づけ（モチベーション）とは、学習者が学習動因を持ち、それを学習行動に移すことをいい、学習動因の主なものとして、学習者の興味・意欲が考えられる。この興味・意欲そして動機づけという因子は、学習への影響力が大きい上に、教材、教授法などの選択により可変的なものである。そこで、学習者の指向を知り、動機づけが成立するような方法を用いれば、特に、学習者が、ある程度の知能レベルにある大学生というような場合には、学習を成功へと導く大きな力となるであろう。

その意味から、まず、当大学及び短期大学の学生について、英語学習に対する意識がどのようなものか、調査、分析してみる。

### §1. 調査

#### 1. 調査の目的

教授対象者である川崎医科大学及び川崎医療短期大学の学生の英語学習に対するモチベーションを探る。各学科間のコースに対する意識の差を入試の成績、環境の違い、という因子も加味して考察する。

## 2. 調査対象

川崎医科大学及び川崎医療短期大学 1979年度第一学年生 332名

科	第一看護科 (1 N)	第二看護科 (2 N)	放射線技術科 (R T)	臨床検査科 (M T)	医 学 科 (M)
人 数	58名	27名	58名	44名	145名

(うち欠席者は除く)

## 3. カリキュラム

	必 修	選 択	時 間 数
1 N	4	2	60時間×3年=180時間
2 N	2	2	60 × 2 = 120
R T	4	2	60 × 2 = 120
M T	4	0	60 × 2 = 120
M	8	0	150時間+90時間=240

(以下各科は略号で示す)

## 4. 4月以来の授業状態

	時間数/週	内 容
1 N	1時間×2	講読, L. L., 授業
2 N	同 上	同 上
R T	同 上	同 上
M T	同 上	講 読
M	1時間×5	講読, L. L., プログラム学習

(短大の「1時間」は45分, 医大は50分を示す)

## 5. 調査方法

アンケート (次頁参照)

## 英語学習についてのアンケート 昭和54年6月実施

I. 英語（授業に限らず一般的にいつて）について  
どう思うか。

1. 大変好きである（興味がある）
2. まあ好きな方である
3. 普通
4. 興味はないが仕方なくやることはやる
5. 大嫌いだである

II. 中学・高校における英語教育は必要だと思うか。

1. 必要
2. 必要でない
3. わからない

III. IIの質問で必要、不必要と答えた人は、なぜそう思うか述べて下さい。

理由 ( )

IV. この大学（医大・医療短大）で英語教育は必要と思われるか否か。将来の自分の進路と考えあわせてみて答えなさい。

1. 必要
2. 不必要
3. わからない

V. IVの質問で必要、不必要と答えた人は、なぜそう思うのか、理由を述べて下さい。

理由 ( )

VI. IVの質問で英語が必要と答えた人は、特に、どの面の必要性を感じているか。自分としては、英語の学習目標をどういう所においているか、又、どの方面に役だてたいか答えなさい。

1. 読む（Reading）

- ① 簡単な手紙とか本とかが読めればよい
- ② 自分の専門に関する記事や本が読めるようになりたい
- ③ 雑誌、小説、新聞などが自由に読めるようになりたい

2. 書く（Writing）

- ① 簡単な文章がかければよい
- ② 論文等自分の専門の文章が書けるようになりたい
- ③ コミュニケーションにことかかないくらいには書けるようになりたい

3. 聞く（Hearing）

- ① 海外旅行して不自由しない程度でよい
- ② 自分の専門に関する事なら、講演とか説明とかの内容が聞きとれる程度
- ③ 一般の英米人の会話が理解できる程度

4. 話す（Speaking）

- ① 海外旅行で困らない程度に話せればよい
- ② 自分の専門のことなら、説明したり答えたりすることができる程度になればよい
- ③ 一般の英米人と自由に会話ができるようになりたい  
1～4の中でも、特に、どの面に力を入れたいか答えなさい。

VII. 自分の英語力についてどう思うか、自己診断してみなさい。

（五段階評価で、5=とてもよい、4=かなり良、3=並程度、2=人より劣る、1=全然ダメ）

1. 読 解 力（5・4・3・2・1）
2. 書 く 力（5・4・3・2・1）
3. 聞 き と る 力（5・4・3・2・1）
4. 話 す 力（5・4・3・2・1）

VIII. 今まで自分でヒアリング・スピーキングに関する学習をしたことがあるか、ある人は、その期間も書き添えてください。

1. 英会話スクール・講座など ( )
2. 個人指導 ( )
3. ラジオ・テレビ等 ( )
4. 市販のカセット教材を使って ( )
5. E. S. S. 等のクラブに所属して ( )
6. なし
7. その他 [ ]

IX. 外国旅行又は留学の経験があるか。

1. ある（期間： ）
2. ない

外国旅行又は留学の希望はあるか。

1. ある
  2. ない
  3. わからない
- その他、外国人と長期間接した経験のある人は、かき添えなさい。  
[ ]

X. L. L. (Language Laboratory) ということを知っていたか。

1. はい
  2. いいえ
- これまでに L. L. 授業を経験したことがあるか
1. はい
  2. いいえ
- これまで英語弁論大会及び英語劇などの経験があるか。

1. はい ( )
2. いいえ

XI. 現在行なっている L. L. 授業についてどう思っているか。

1. 必要である（興味がある）
2. 不必要（興味がない）
3. わからない（どうでもよい）

Iの質問で英語を好きと答えた人、なぜ、どういうきっかけで好きになったのか。またキライと答えた人は、いつごろから、どうしてキライになったのかかき添えなさい。

表1 入試の成績の英語平均点 (100点満点)

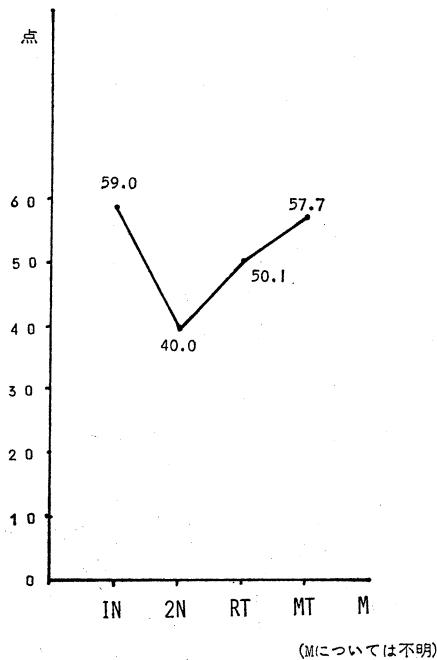
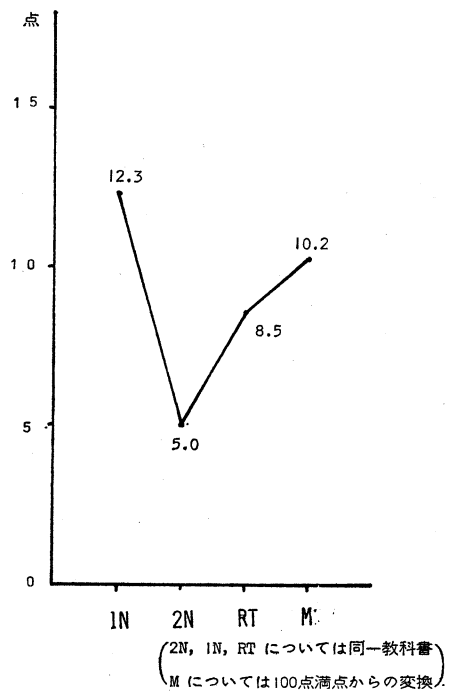


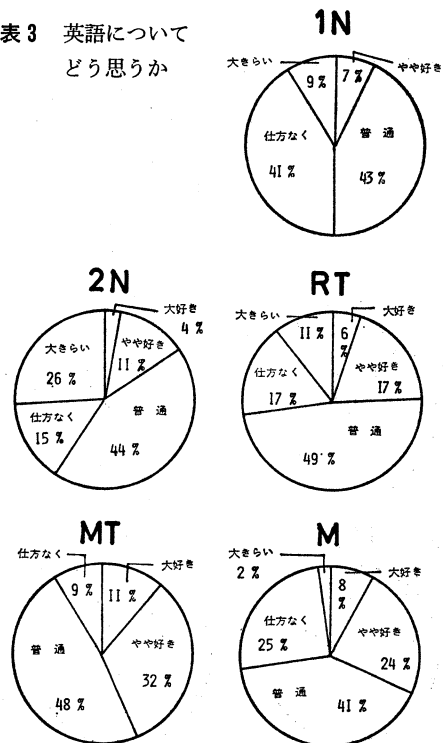
表2 聞きとりテストの平均点 (S.541 学期中20点満点)



§2. 調査結果及び検討

英語を好きか嫌いかという質問に対しては、各科とも「普通」と答える者が最も多い(表3参照)。ただしその中でもMTとMでは「好き」とする者が比較的多い(43%, 32%)のに対し、1Nではやや「嫌い」という方向への片寄りを見せ、50%が「大嫌い」又は「仕方なくしている」と答えている。MTの「好き」の方向への傾きは、入試の英語の平均点(57.7)からいって予想できることだが、平均点59.0と短大5学科中最高をマークしている1Nが、他学科より著しく「嫌い」の方向へ傾いていることは、注目に値する。2Nでは「大嫌い」と答えた者が26%と、この部分に特徴的な高い数字が出ているが、これは、2Nの学生のこれまでの経歴(ほとんどが看護科出身である)や適性(少なくとも英語においてはほとんどの者が「落ちこぼれ」ている)からいって当然の結果と思われる。

表3 英語について  
どう思うか



中学校・高等学校における英語教育の必要性は、各学科ともほとんどの者が認めている（表4参照）。理由としては、現代人の一般教養として不可欠であるからというものが最も多く、また、将来英語が必要になった時の基盤作りと答える者も多かった。

それが、当大学及び当短大における英語教育の必要性という点になると、短大生では一様に「必要」の占める割合が減少してくる（表5参照）。特に著しいのが1Nで、「必要」を認める者は、中学・高校の場合と比べて81%から67%へとダウンし、「不要」が0%から10%にアップしている。これに対してMでは、逆に83%から93%へと増加している。英語に対する指向が現在非常に高まっていることを示している。なお、MT、及びMでは、大学における英語教育を不要とする者は一人もいない。全般的にみて「必要」の理由としては、メディカル、及びパラメディカルの分野において英語の果たす役割が広がっているからというものが多かった。

表5 大学における英語教育の必要性

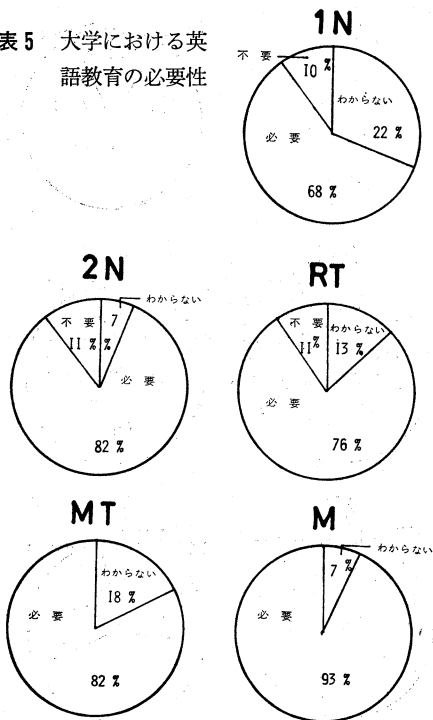


表4 中学・高校における英語教育の必要性

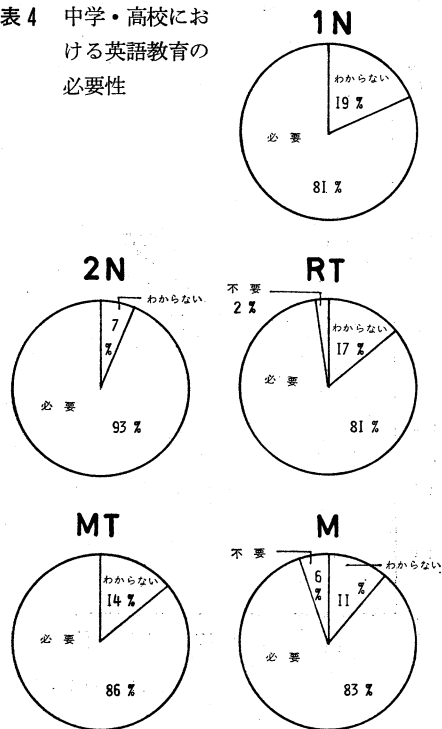
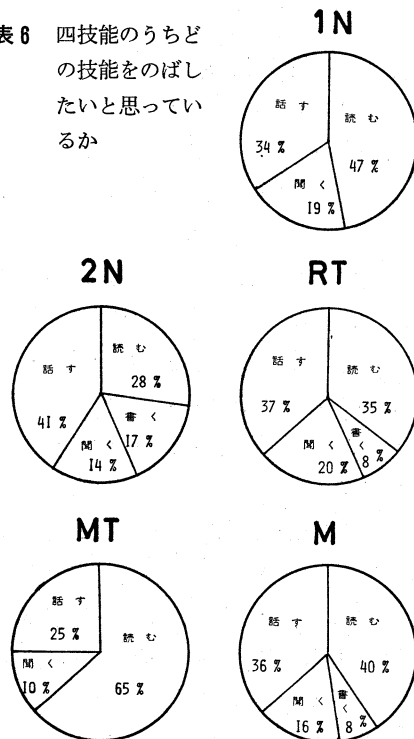


表6 四技能のうちどの技能をのばしたいと思っているか



現在英語を学ぶにあたってどういう方面に重点を置きたいかという質問では、各科とも「読む力」と「話す力」という2つの方向に分化の傾向がある(表6参照)。中でも、どちらかといえば「読む」ことへの指向が強いが、「聞く」「話す」を一つにして「会話力」という面で統一すれば、1N, 2N, RT, Mは、これが過半数を占め、「読み書き」よりは「会話力」という指向がうかがわれる。ただ、MTは「読む」が圧倒的に多く(65%)、そのため、会話への指向が他学科より低くなっている。これは、MTのみが現在L.L.授業を行っていないということに原因があると思われる。

また、「読む力」の中では、どの程度のところに目標を置いているか、という質問では、各科とも「専門関係の文献が読めるようになりたい」と答える者が過半数を占め、専門指向型を示している(表7参照)。

「書く」ことは、あまり重視されていないで、特に1N, MTでは0をマークしている。その目標設定も、短大生は、「簡単な文章が書ける程度」が半数を占め、専門的な文章を書く力を望む者の率は極めて低いのに対し、医大生はここでも「専門指向型」となっている(表8参照)。

「聞く力」に対する指向は、大体各科とも10~20%といったところであるが、その目標としては、1N, 2Nは「海外旅行で困らない程度」が多く、MTではそれに「専門指向」が加わり(30%)、RTでは「かなり程度の高いヒアリング力」を望む者が増え(40%)、Mでは、更に「専門指向型」「高度指向型」となっている(表9参照)。

「話す力」においても、1N, 2N, RT, MTは、ともに「海外旅行で困らない程度」の簡単なスピーキング能力を望む傾向にあるが、Mは、ヒアリングにおいてと同様、専門で通用する力、自由に意欲の疎通がはかれる力を求めている(表10参照)。

以上、全体的にみて、次の2点がいえる。

- ① メディカル及びパラメディカルの学生の英語

表7 読む

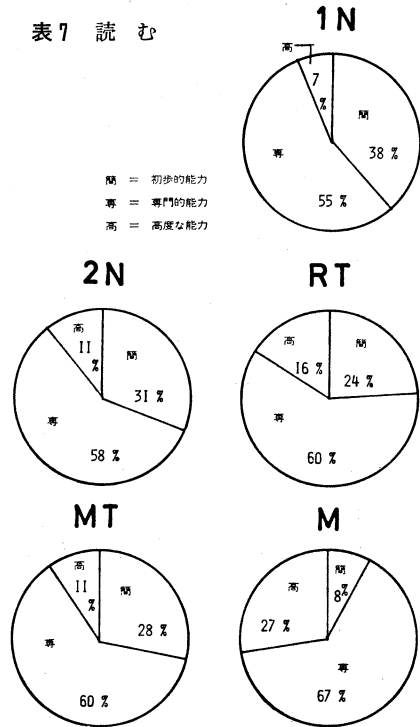
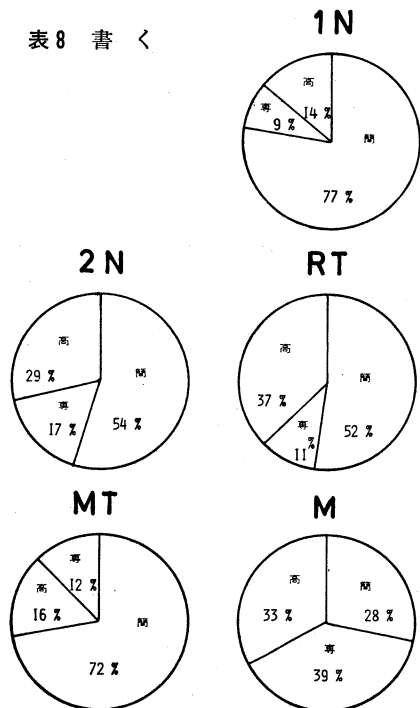


表8 書く



に対する認識は、専門と密接に結びついた pragmatical なものであるといえる。彼らにとって、英語学習は、専門との関連部分でより重要な意味をもつものであり、その点から、専門文献を読みこなせる力に対する指向がみられる。

② 「読む」面では「専門向け型」であるが、もう一方の彼らの興味対象である「聞く・話す」面では、短大生は大体「初等英会話指向」である。

医大生が、四技能全てにわたって「専門及び高度指向型」なのは、彼らの将来の職業における英語の役割からくるものであろう。つまり、短大生は、将来のコースにおいて、英語の reception (受身) の側の能力—「読む」「聞く」は重要だが production (能動) の側の能力—「書く」「話す」はそれほど要求されないと考えている。それに対して、医大生は、将来、専門の英語文献を読んだり、講演を聞いたりするばかりでなく、自ら英語論文を書いたり、外人と話したりすることも必要となると考えていると想像される。

自分の英語力をどう評価するかという質問においては、全体的にみて「読む」能力を評価する者が多く、「書く」能力は普通以下の方向へ片寄っている(表11参照)。

「聞く」能力と「話す」能力については、「聞く」能力を認める傾向が強い。学生自身、読めても書けない、聞けても話せない—Production の能力不足—という意識があることがわかる。

特に「聞く」の中では、1N、MとRTとの間、1NとMTとの間に興味深い関係が見られる。即ち、1N、Mは、ともに聞く能力を認める方向にあり、RT、MTは反対に苦手意識を持っているというものである。1N、MとRTの差は、入試の成績及びL.L. 授業での毎回の聞きとりテストの平均点の差で説明がつく(表1及び表2参照)。

入試の成績と聞きとりテストの成績からは、言語

表9 聞く

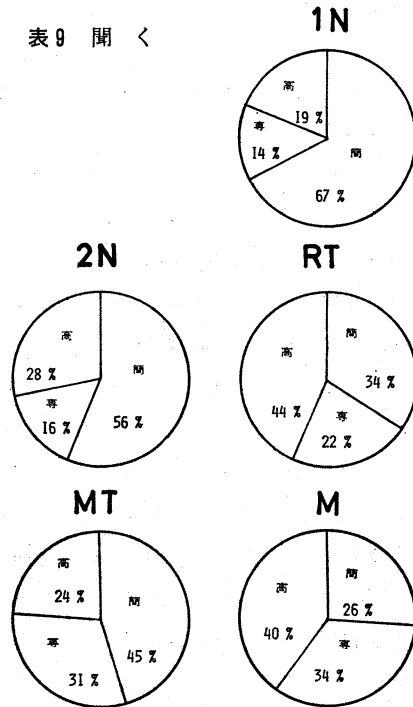


表10 話す

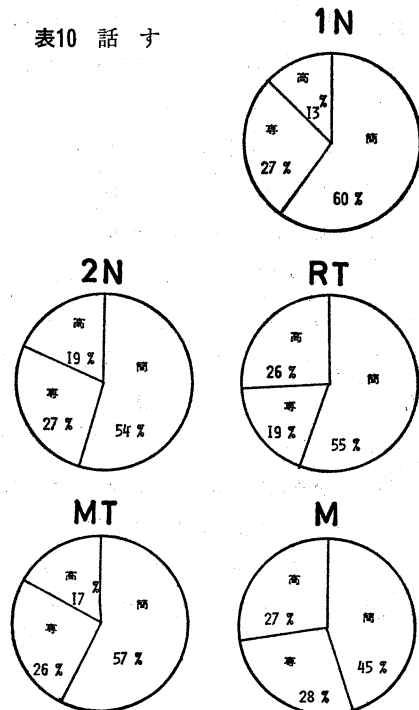
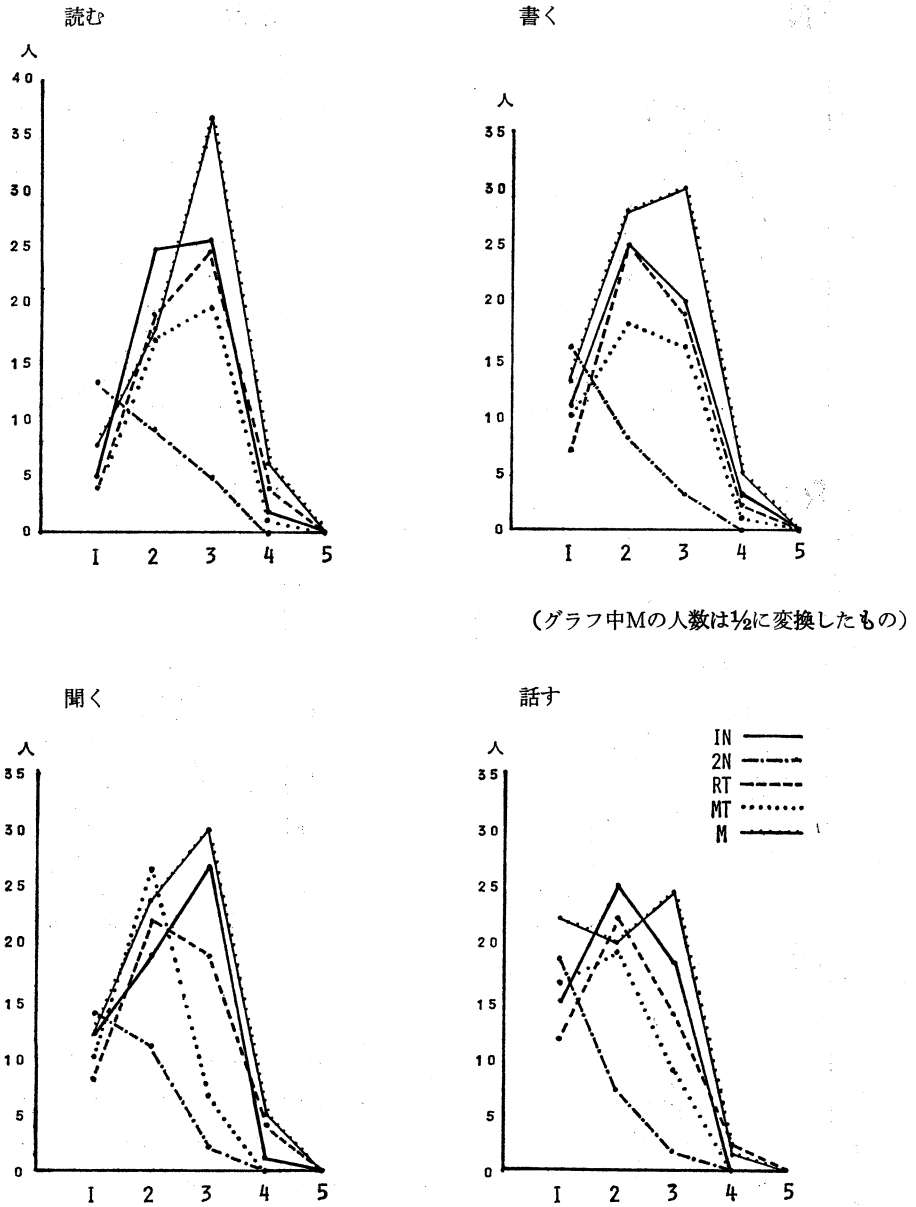


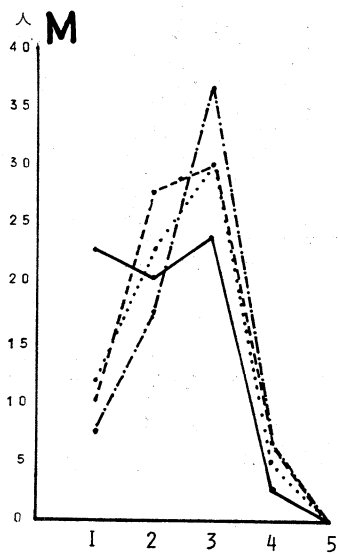
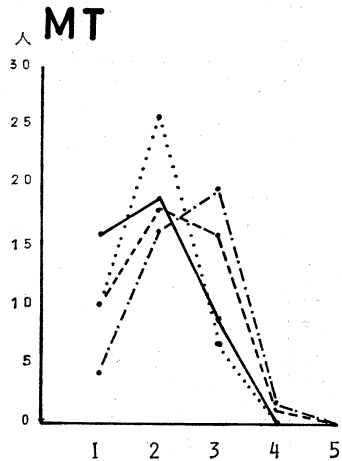
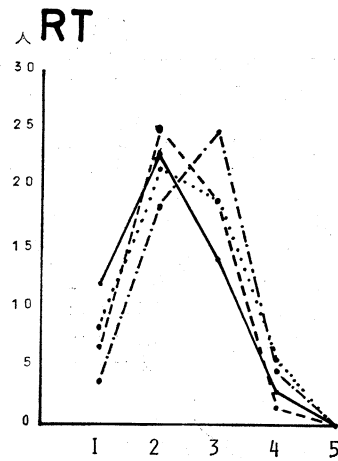
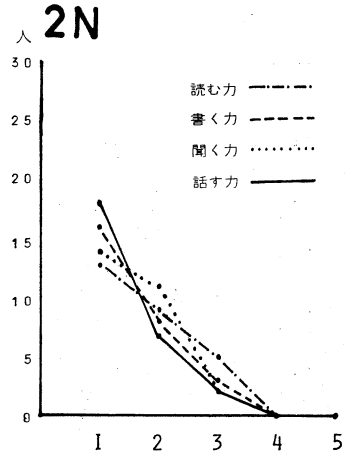
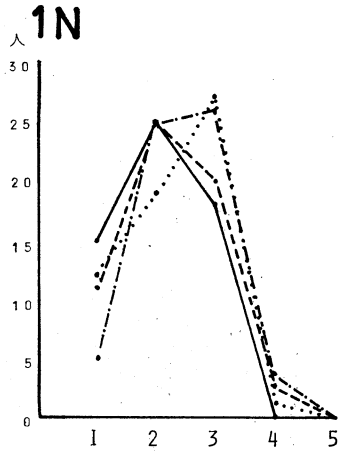


表11 自己の英語力に対する評価



の運用能力が、その基礎的な力（例え、読み書き中心とはいっても）と密接な相関関係があることもわかる。ところでこれを矛盾しているように思えるのは、1Nと入試においてほぼ同じ成績のMTが自己の「聞く」力を低く評価していることである。しかし、これは、MTにL.L. 授業の経験がなく、「読む・書く」といったこれまでしてきた学習に比べ自信がないためと考えられる。

表12 各科別にみた四技能の自己評価



各科別に、四技能についての評価をみると、Mが比較的全般にわたって自己の能力を認めていること、2Nは、すべての能力にわたって低い自己評価で、他学科とは全く異なった線を描いていることがわかる。

個人的な英語学習の経験は、「ない」と答えた者が60～70%で、意識の低さがうかがわれる(表13参照)。もっとも、受験勉強に忙しくてその余裕がなかったためということも考えられるが、当大学・短大のレベルからいっていかがなものであろうか? 「ある」と答えた者の中では、マス・メディア(テレビ・ラジオ)を手段とした者が最も多い。

外国旅行及び留学の経験は、短大調査対象者182名中1名のみというのに対し、医大生では38名(27%)という高い数字を示している(表14参照)。これはモチベーションの差というより、家庭環境及び経済状態の差によるものであろう。

外国旅行及び留学の希望は、現代の世相を反映し、いずれの科でも高い割合を占めていて、今後の学習のモチベーションに対して希望がもたれる(表15参照)。

表13 個人的な英語学習の経験

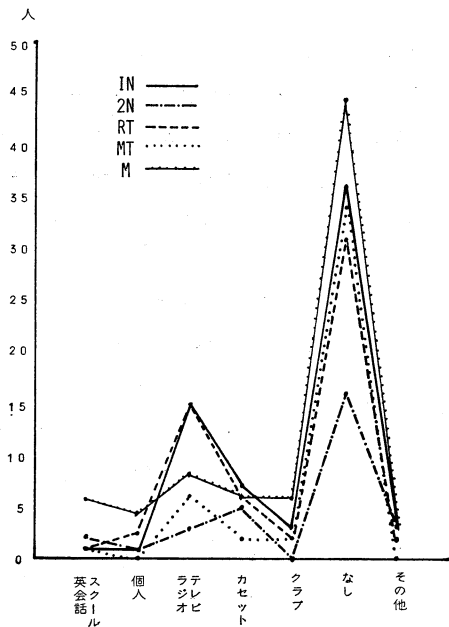
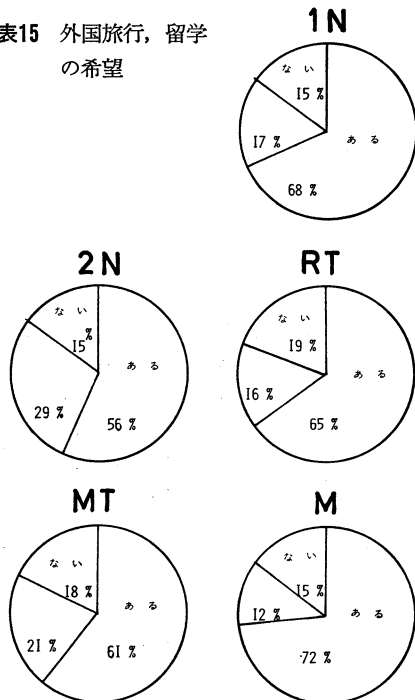


表15 外国旅行, 留学の希望

	ない	ある
1N	58	0
2N	27	0
RT	53	0
MT	43	1
M	102	38

(単位: 人数)

表14 外国旅行, 留学の経験



L.L. (Language Laboratory) ということを知っている者は多く、70~80%の高率を示すが、その経験者はやはり少ない(表16, 17参照)。 医大生の場合には62%が有経験と群を抜いているが、これは、L.L. 設備のある附属高校出身者が全学生の半数を占めるためである。英語弁論大会、英語劇の経験者は各科とも少なく、2Nでは全くない(表18参照)。

現在のL.L. 授業は必要か否かという質問では、「必要」と答える者が、各科とも40%前後で「不必要」をはるかにしのいでいるのに対し、1Nでは「必要」と「不必要」がほぼ同数となっている(表16参照)。1Nにおける「専門と無関係のものは拒む」傾向がうかがわれる。彼女らは、アンケートの「理由」の項でも「医学英語—特に医学英単語の修得のみで教養としての英語は不要、またする時間が無い」と答えている。

	はい	いいえ
1N	48	10
2N	20	7
RT	13	40
MT	37	7
M	109	26

表16 L.L. を知っていたか(単位:人数)

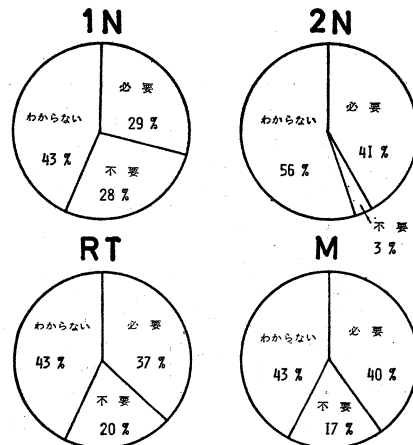
	ある	ない
1N	22	36
2N	7	20
RT	17	36
MT	10	34
M	84	52

表17 L.L. 授業の経験(単位:人数)

	ある	ない
1N	4	54
2N	0	27
RT	4	49
MT	6	37
M	16	120

表18 英語弁論大会・英語劇の経験  
(単位:人数)

表19 L.L. 授業についてどう思うか



以上、英語学習における意識とモチベーションについて、当大学及び短大の学生の傾向をまとめてみる。まず、2Nについては、英語に対する苦手意識が強く、必要性は認めているものの、仲々現実の学習に結びついていない。1Nは、自らの能力を認めているし、実際に英語学習に最も適した能力を持っているにもかかわらず、モチベーションができていない。つまり、自分の専門では医学英単語以外の英語は必要でないし、国家試験科目でもないから、といった「専門バカ指向」の傾向がみられる。RT, MT, Mは、むしろ「専門指向型」ではあるが、片寄りのない分布を示し、英語学習に対する健全なモチベーションが感じられる。1Nが専門学校的感覚といえるなら、RT, MT, Mは、やや一般大学的になっているといえよう。(ちなみに、一般大学の英語を専門としない学生は、一般教養の英語に対して「教養」として重要という意識のようである。従って英語を専攻しない学生に、専門的な英文学書や英語史を教えても抵抗がないのであろう。)

ところで、このような各学科の意識の差は何によるものであろう。学生は入学時には、いずれも同じ状態のはずである。それなのに、1Nは英語不要の方向に傾き、MT, Mは英語重視の傾向にある。Mは将来の職業という点から説明がつくにしても、1NとMTにどうしてこのような大きな意識の差が出ているのだろうか。学生自身が悟った結果だろうか、それとも学生にそう感じさせるような何かが周囲の雰囲気として存在しているのだろうか。

### § 3. 考 察

以上の、英語学習に対するモチベーションの調査結果に、他の能力・身体・環境といった要素を加味して、当大学及び当大学の学生の傾向を考察してみる。

まず2Nの学生においては、学習能力、モチベーション、身体、環境といった学習者側の4因子全般にわたって低レベルである。即ち、英語の基礎力に欠け、苦手意識から意欲に欠け、授業時間数も少なく、教科における英語の位置づけも低いといった具合である。このような学生が興味を持って英語学習を続けることは困難に思われるが、専門との関連及び英会話といった面にはかなりの指向をみせているわけであるから、教材、教授法を工夫すれば、その指向を実際の学習成果にまで発展させることは不可能ではあるまい。

1Nは能力もあり、授業時間も多いが、「教養」としての英語学習では、健全な動機づけが行なわれない。「専門指向」、「読解力指向」が高いのでその面で工夫すれば、英語学習に対する適性は最も高いのであるから、成果が期待できよう。

RTは、英語学習に対してかなり意欲的ではあるものの<sup>モチベーション</sup>動機づけが成立しているかどうかは疑わしく、この意欲も、彼らの要求になかった教材及び教授法が与えられねばすぐに消滅してしまう類いのものである。

MTは、英語学習に対して短大4学科中最も高い指向を示している。1Nの医学英単語がわかればよいという意識とは異なり、単語も含めて英語全体が自分に役に立ち、また専門にも生かされるという前向きの姿勢がみられる。

Mは能力、意識、モチベーションといった面もさることながら、環境的要因において他より有利になっている。即ち、240時間という授業数、高校時代からのL.L.の経験、外国旅行の経験、家庭環境が、英語学習にとって好ましい条件となっている。

以上、対象とした5科の英語学習に対する適性及びその問題点について考察したが、この論の求める、「当大学及び短大の学生に最も適した英語教育」という点から次の3点がまとめられる。

- ① 学習能力：中～中下
- ② 指 向：「読み書き」では「専門指向」  
「聞く話す」では「初歩指向」
- ③ 年 令：すでに成人に達している

この3点を考慮に入れて、効果的な教材及び教授法を開発したい。

## II. 教材及び教授法の選択

Iでつかんだ学生の特質を考慮に入れて、最も有効な教授法及び教材を選択しなければならない。学生の指向にあわせて、①読み書き、②聞く話す、の2点に分けて考察するのが適当と思われる。

### §1. 読み書き

専門指向傾向にあわせて、メディカル及びパラメディカルの関連分野に題材を求める。教授法としては、Grammar-Translation Method が最適であろう。

注) Grammar-Translation Method の採用について

従来、Grammar-Translation Method (文法訳読中心の教授法)には、数多くの批判がなされてきた。即ち、①文法を教え、訳読させるというこの方法では、言語体系は学べても、言語運用能力の習得につながらず、知っていても使えないという弊を招く、②逐語的な、字面を追った「訳読」で、内容把握ができない、③長年用いられてきた方法で、学習者にとって新鮮味がない、ということである。

しかしながら、「読む書く」力の習得に限り、また、学習者の年齢・知性度が高い場合には、特に有効な方法であり、教材に学習者の motivation とつながるようなものを選択すれば、かなりの成果があげられるのではないと思われる。

付) 語い指導

読み書きの指導に加えて、語い指導、特に専門用語指導を行なう。

教授法としては、語源法(語幹及び接尾語・接頭語をくみあわせる造語法、及び未知の語の分析法を教える)を採用する。

## §2. 聞く話す

初等会話指向にあわせて、基礎的で日常的な会話に題材をとる。

教授法としては、L. L. (Language Laboratory) を利用した Oral Approach が適当であろうが、年齢を考慮に入れて、機械的な mim-mem 及び pattern practice は最小限にとどめ、思考力に訴える方法を用いる。

### 注) Oral Approach とは

現在、聞く話す能力を養うための教授法として主に用いられている。この方法は、言語の基礎的な教材をすらすらと口頭発表できることを目標とし、またそれを習得のめやすとする。それに達する指導技術の代表的なものに mim-mem (模倣記憶練習) とか pattern practice (文型練習) などがある。この方法の背景となる構造主義的言語観は必ずしも言語の真理をとらえているものとはいえないが、言語習得の一部が習慣によって形成されるということもまた否定できない事実である。

この Oral Approach の目標を、1人の教師が1クラス全員に対して、限られた時間で達成させるためには L. L. の利用は最も有効な手段であるといえる。

## Ⅲ. むすび

以上の考察をもとに我々は、担当する英語の時間数を全て二等分し、その一方を、専門分野に教材をとった「読むこと中心の授業」、他方を、初歩的教材を用い、L.L.を導入した「hearing & speaking 中心の授業」とした。教授法には、Ⅱで述べたように、前者には Grammar-Translation Method、後者には Oral Approach を主体としたものを用い、現在実践段階にある。この分担の結果、90分という、語学授業としてはやや長目であった授業時間が、45分×2という適当な長さになり、カリキュラム的にも改善されたと信じる。これらの実践の具体的な成果については次回報告する。